

加藤朝子（大阪府大阪狭山市）

タイトル「家（うち）とウチ」

クビナガ恐竜、我が家を食らう——ガツガツと完食——。

去年の冬、家は炎に食べられた。レアの逆、そう全焼。キャンプファイヤーの後みたいや、と誰かが言うた我が家。幸い家族4人無事やった。でも悲しみ、不安、心は真ブルー。涙で火は消せんけど、泣くことが一番楽やった。そやけど能天気だけが取り柄のウチら一家。から元気をふり絞って、新居のアパートの準備やら忙しく働いた。それでも、ウチはぽっかりとした悲しみがあって、完全燃焼した我が家に入ると鼻水が止まらんかった。家の中を風が通り雪の舞う。屋根の合間から空よコンニチハ。隙間から家の匂いやら思い出が、風に飛ばされ雪と溶けていく気がした。

火事から一週間後が家の命日。取り壊しはイカツイおっちゃんと首の長い恐竜みたいなクレーン車が、ガラガラと崩していった。いつもギリギリの年末大掃除が今年は早かった。黒い柱を運ぶクビナガ恐竜、よく働く。それを見る三姉妹、ウチと姉と母。クビナガが衣装部屋のあたりを掃除し始めた。クビナガが下から頭をもたげた瞬間、ウチらトリオとイカツイおっちゃんの8つの目は点。クビナガがくわえとるもの、それはベージュ。原型を留めたブラジャーが空をぶーらぶら。クビナガが一時停止の後、仕事再開。トリオ爆笑。こんなに笑ったんはいつ以来やろ。笑った瞬間、ぽーんと悲しみが体からはじけた。一瞬のしょうもない出来事。でも家の最期にオチができた。火事のことを聞かれる時もこの話をする、悲しさが和んだ。おかげで家なき子を気取らずにすんだ。“笑い”が悲しみを蹴っ飛ばしてくれたんやと思う。

もう、家一号は心のアルバムに大事にしまおう。新しい家をみんなで作っていこう。大きなアルバムに“笑い”をいっぱい詰めよう。

——最後に気になるどうでもいいこと。あのブラジャーは誰のブラジャー。ウチのやないで、ベージュやし。いやホンマに、たぶん——。